

## 罪の闇に住む人類に 与えられた光

マタイ4章12～17節

2022年1月9日

松田 基子 師

人間の創造主であられる神様は、世界中に何十億の人が居ようとも、一人ひとり、どの人も神様にとって、掛け替えのない存在として、命を与え、使命を与えて、世に送り出してくださっています。

そのように言いますと、人間の側からは、  
「いや・・・そんな事はない。

持てる者と持たない者。力ある者と力無き者、頑強な者と病弱な者、この世界はありとあらゆる所で、不平等、不公平ではないか」  
との反論が返って来ます。

確かに、この世界の現実はそうです。

しかし、そこで尋ねたい事は、

『それらは、神様のせい、  
神様の責任でしょうか』

と言うことです。神様が、私たち人間を、掛け替えの無い存在として、それぞれに違った使命を与えて、世に送り出してくださっているのは、

『世の中の、大量生産される、  
均一商品の様ではない』

と言う事です。神様に対して、人間の創造が不平等、不公平だと訴える人々は、

『均一商品のように、何故造らないのか』  
と言っているのに、気付いていません。

神様が、1人ひとりに、違った使命を与えて、世に送り出しておられるのは、

『人が、人として尊ばれ、互いに支え合い、  
助け合って愛を築いていくため』

でした。1996年に、召天した、ヘンリー・ナーウエンと言うオランダ出身の優れたカトリック司祭は、重い障がいを負った人々のラルシュ共同体で、一緒に生活をした方ですが、そこでの、愛し合う共同生活を通して、

「障がいは、神様からのギフトだ」

と書かれています。神様は愛を築き合うために、人間を創造されました。その御心に従わなかったのは、私たち人間です。人間は神様に繋がり、従ってこそ、愛が生まれ、他者を愛することが出来ますが、神様との関係を切って、自分本位、自己中心に生きた世界は、何もかも神様の御心とは逆の、罪の世界を生み出してしまいました。

神様から離れる事は、罪に支配され、罪と共に永遠の滅びに向かう事です。神様の愛は、その事を放置なさる事は出来ませんでした。かと言って、聖にして、義なる神様は、罪を受け入れる事は出来ません。人類を罪の滅びから立ち帰らせ、神様に結ばれるようにする為には、人類の罪が贖われなければなりません。神様はそのために、神の御子を人類の罪を贖わせるために、人の世に誕生させられました。

神様が、人間一人ひとりを、掛け替えの無い存在として、世に送り出された何よりの証明は、その一人を救いたいために、ご自身の独り子さえ、人類の罪の贖いの為に、お与えになった事です。神様の愛は、ここにあります。人間は何を忘れても、神様が独り子をお与えになった程、このわたしを掛け替えの無い存在として愛し、この世に送り出して下さったという事を忘れてはなりません。

人生を生き抜く力は、ここにあります。さて、神様の独り子として、この世に人として、生まれて来て下さったイエス様は、ご自身の使命が人類の罪を贖う事であることを自覚しておられました。イエス様は愈々(いよいよ)、その使命に向かって、公生涯に、立たれる事になりました。そのためにイエス様は、先ず、ご自身が人類の罪を贖われるお方であることを表明するために、罪ある人間の側に立ち、罪を引き受ける証に、罪人の列に並んで、洗礼を受けられました。

人間の洗礼は、罪に負けてしまった結果の洗

礼でした。イエス様も罪を犯されたなら、贖い主としての資格が無くなります。悪魔はイエス様からその使命を奪うために、神様との霊の代わりに、荒れ野で、40日40夜、断食の祈りを献げられたイエス様を誘惑に懸けました。しかし、イエス様は、悪魔の誘惑に勝たれました。その後、マタイの4章12節を見ますと、

「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」と記されています。

このヨハネは、イエス様が罪人の列に並んで洗礼を受けようとされた時、イエス様に、神的存在を感じて、

「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」

と問い、イエス様が来るべきメシア、神の国をもたらすための審判者である事を期待した人物です。彼は聖なる神様に受け入れられたいと、自らに厳しく清い生活を課し、民衆の浄化を訴え続けた預言者です。彼は神様のみを恐れ、人を恐れる事はありませんでした。領主をも恐れず、罪を糾弾しました。その事については、マタイ14章に記されています。

洗礼者ヨハネを投獄しようと、捕らえたのは、ヘロデ・アンティパスです。彼はガリラヤとヨルダン川東岸ペレアの領主でした。そのアンティパスが兄、フィリポの妻、ヘロディアに横恋慕して、ヘロディアを自分の妻にしたのでした。この事に関して、洗礼者ヨハネは、臆せず領主アンティパスに対して、

「あの女と結婚することは律法で赦されていない」

と言ったのです。その言葉はアンティパスとヘロディアにとって、一番聞きたくない言葉でした。アンティパスは、自分の権力を使って、ヨハネを捕らえました。イエス様は、正しく生きるヨハネが、この世の権力に捕らえられた事について、どんな思いを抱かれたのでしょうか。イエス様は、私たちのように、

『ああ、・・・可愛そうな』  
などとは、思われなかったことでしょう。

罪のこの世で、神様の義を全うするヨハネに、ご自分もまた、同じ道を歩まれる覚悟に立たれ、神さまの守りと導きを祈られたことでしょう。そしてご自身の使命に立ち上がられました。それは、ご自身による、神の国の福音を宣べ伝えるために、ガリラヤに戻られることでした。そこには神様からの使命に立たれた、イエス様の新しい展望がありました。

13節に、  
「そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた」

とあります。ナザレはガリラヤ地方でも南方に位置して、都市からは離れた人口も多くはないところで、その上、親兄弟、地域の繋がりなどの柵(しがらみ)がある所でした。イエス様はそう言う世界から抜け出して、ただ一筋に神様からの使命に生きられるために、ガリラヤ湖の北西に位置する、カファルナウムに宣教の拠点置いて住むことにされました。カファルナウムは、地の利をえて、栄えた商業都市です。ヨルダン川を渡って東西に往来する事ができます。ダマスコとエジプトを結ぶ幹線道路が通っていて、物流がさかんでした。ガリラヤ湖での漁業も盛んでした。外国と接していて、外国人との接触も多くありました。イエス様が宣教の使命に立たれるのに望まれた地でした。

今日的に考えても、当時のカファルナウムは、宣教の開拓地として、誰もが望ましいと賛同する所です。しかし、当時の状況は違っていました。14節、15節に、

「それは預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの地、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、」

と記されています。これは称賛の言葉ではなく、軽蔑的な意味が込められた言葉でした。

預言者イザヤは、その地方について、イザヤ書の8章23節と、9章1節で、  
「先に、ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」と預言しています。

ガリラヤ地方と言うのは、北方からの侵略に真っ先に晒されるところです。紀元前700年代、東方のメソポタミア地方で、力を得たのは、新アッシリア帝国を築いたティグラテピレセル三世でした。彼は常備軍を創り、強化して、周辺の国々を次々に侵略していきました。彼は紀元前734年と、732年に、パレスチナ遠征を行い、イスラエル北方へ侵略し、ゼブルン、ナフタリ、海沿いの道と言うのは、地中海沿岸の町々、そしてガリラヤを制圧し、これらを属州としました。アッシリアは、侵略の度にその地の主要な人々を捕囚として他の地に移し、その代わりに、他の土地から外国人を入植させました。そこでは当然、外国人との結婚が起こります。しかし、その事は遠方に位置して、その難に遭わなかったエルサレムを初め、南部の者達にとっては、選民としての純粋な血が守られていないと言う軽蔑すべきことだったのです。

侵略で苦しんだ上に、同胞からは軽蔑されると言う、二重の重荷を負わされました。しかし、イザヤは、そこに神様の光が当てられる事を預言していたのです。人間の考えと、神様のお考え、御計画は全く違います。人間は何時も、現実の力関係や、利害から測ろうとしますが、神様のお考えは、何時も、愛からの御計画です。エルサレムの宗教指導者達や、民衆は、  
『自分たちは、神様に選ばれた選民であり、神様に従っている。しかし、異邦人は、神様を崇めない、汚れている罪人だ、彼らに比べ、自分たちは違うのだ。』  
と言う、宗教的な高ぶりを持っていました。

それは、神様が、そしてイエス様が、一番お嫌いになることでした。神様は、異邦人も、全ての人間の命の与え主、創造主として、一人ひとりに、掛け替えのない愛を注いでおられるのです。《神様が一番悲しまれる》のは、  
人がひととして、尊ばれない事です。イエス様はその人達にこそ、神様の愛の御心を述べ伝えるべきだとお考えになったのです。

#### 〈預言者イザヤの目には〉

『ティグラテピレセル三世に、故郷を荒らされ、捕囚に連れて行かれた人々は、暗闇に住む民、死の陰の地に住む者に映りました。』  
しかし、

#### 〈イエス様の目に〉映った全人類は、

『罪の暗闇に、行くべき道が分からず、迷いに迷っている姿であり、そこから、どんなに抜け出そうとしても、光が無いので、抜け出す道が分からないでいる姿でした。』

それは永遠の滅びへの、死が待ち受けているだけの世界でした。イエス様は、その全人類を見捨てる事が出来になりませんでした。暗闇の世界には、外から光が入って来なければ、出口への道は分かりません。イエス様は、**神様の世界から、世を照らす真の光**として、この世に来てくださいました。

ヨハネ福音書の、8章12節で、

「わたしは世の光である。わたしに従う者は、暗闇の中を歩かず、命の光をもつ」と宣言されました。イエス様は、ご自身の身に、人間存在を暗黒に塗りつぶしてしまった、罪を一身に引き受けられました。その罪を贖うために、身代わりの十字架に架かられました。そして、神様に捨てられ、暗黒の黄泉にまで降られました。神様は、イエス様のこの贖いを受け入れ、人類に罪の赦しを与える証明に、イエス様を十字架の死から3日目に復活させられました。イエス様はそこで、真の光となられました。永遠の**罪の滅びから永遠の救いへの道**が、イエス様によって開かれたのです。

イエス様だけが、暗黒の罪に汚れた、永遠の死に向かう世界から、永遠の命に向かう道に、導いて下さる光なのです。イエス様はその使命に立たれ、カファルナウムにおいて、

「悔い改めよ。天の国は近づいた」

と言って宣べ伝え始められました。この言葉は洗礼者ヨハネも語った言葉です。しかし、その立場、内容は、ヨハネとイエス様では、全く違っていました。

〈ヨハネの〉

「悔い改めよ。天の国は近づいた」は、『審判者としてのメシアの到来に備えさせる脅迫的なもの』でありました。

しかし、

〈イエス様の〉、

「悔い改めよ。天の国は近づいた」は、『神様は罪に汚れた、自分で自分を投げ出したくなるような、罪深い人も、その存在を掛け替えのない存在として愛し続けておられる』のだ。だからその、『神様の愛を信じて、神様の懐に飛び込みなさい』と言うものです。

悔い改めとは、神様に向きを変えることです。

〈イエス様〉が、

その罪の全てを負ってくださるからです。イエス様に依って、天の国は開かれるのです。イエス様が、天の国をもたらせて下さるのです。そのイエス様を信じて、自分の全存在をイエス様に賭けることが、救いなのです。イエス様はご自身を与えて、光となって命の道へと導かれました。

しかし、問題はそれを聞いた人間の側に、自分が暗黒に中、死の陰の地にいるという自覚があるか、無いかです。カファルナウムの人々は、イエス様という、真の光が、その地に来て下さったにも拘わらず、人間的な考えで、イエス様を見、イエス様を測って、イエス様を信じようとはしませんでした。マタイ、11章23節で、イエス様は、

「カファルナウム、お前は、天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。お前のところでなされた奇跡が、ソドムで行われていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。しかし、言っておく。裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰で済むのである」

と言われました。私たちに必要な事は、神様の愛を信じ、イエス様を真の光と信じ、自分の全存在を賭けて、従って行くことです。

そこに救いがあり、永遠の命が与えられるのです。そこに神様の愛の御心があるのです。私たちも、この一事に賭けて、光であるイエス様に従って参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、私たちの命の与え主、創造主として、一人ひとりを掛け替えの無い存在として愛し、世に送り出して下さっている事を、心から感謝いたします。御心に背いて罪の暗黒にうずくまり、永遠の滅びに向かっていた者を、尚も愛し、イエス・キリストを、真の光として遣わし、私たちを照らし、イエス様は、私たちの罪を、十字架に贖い、命の道へと導いて下さいました。

この御愛を、寸分疑うことなく、光であるイエス様の導きに従って、行く者とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。